

□海外文献紹介□

ヒト食道・胃の正常および癌組織
にみるプラスミノゲンアクティ
ベーター

Plasminogen activators in normal tissue and carcinomas of the human esophagus and stomach: *Sier CFM, et al* (Gut 34: 80-85, 1993)

プラスミノゲンアクティベーター (PA) はプラスミノゲンをプラスミンに変換する蛋白分解酵素で、組織型 (t-PA) とウロキナーゼ型 (u-PA) に分類される。前者は血栓溶解に、後者は主に組織の再構築や腫瘍の浸潤に際し細胞外基質の分解に作用すると考えられている。近年、癌の発生・進展と PA の動向との関連性が注目されており、乳腺、肺、前立腺、胃、食道、結腸起源の種々の腫瘍で u-PA が組織中に高濃度に含まれることが研究報告されて

いる。そこで著者らは、上部消化管由来の癌腫中の t-PA, u-PA 含量 (抗原量および活性) を生検組織を用い ELISA 法にて測定し、非病変部との対比と、更に癌腫の分化度・進行度 (TNM 分類)、背景粘膜との関連性につき検討した。

組織中 PA 抗原量と活性はほぼパラレルな動きを示した。

非病変部粘膜の総 PA (u-PA + t-PA) は健常者のそれらとほぼ同値で、食道・胃・十二指腸と、肛門側の粘膜ほど高値を示したが、u-PA/t-PA 比は 3 者間に差を認めなかった。一方、病変部では、非病変部に比し u-PA が食道癌で 13 倍、胃癌で 6~7 倍と有意に高値を示したのに対し、t-PA は食道癌で非病変部より高い傾向を認めたが、胃癌では逆に有意に低値を示した。また、u-PA/t-PA 比は食道・胃とも病変

部で有意に高値を示した。なお、以上の成績は癌腫の分化度、病期、潰瘍・炎症などの背景粘膜の性状に関連を有しなかった。

以前著者らは結腸癌のサンプルで、癌腫中の u-PA 量、u-PA/t-PA 比が増加し、t-PA 量が減少することを報告したが、今回の食道および胃の成績もこれに矛盾しないものであった。ただ食道癌で t-PA 量が高値を示したが、その理由は扁平上皮と円柱上皮の起源上皮の差によるものと考えられる。既に乳癌で研究が進められているように、今回の検討結果は、u-PA 含量の増加が上部消化管の悪性腫瘍の発生および予後を予知する 1 つのパラメーターとして認識される可能性を支持するものである。

(愛知県がんセンター消化器内科

鈴木 隆史 抄)